

# シンポジウム「比喩の身体性と知性」をめぐるって

野田 大志

## 1. はじめに

第59回表現学会全国大会シンポジウム<sup>1)</sup>は、登壇者に小松原哲太氏(神戸大学)、鷺見幸美氏(名古屋大学)、西山秀人氏(日本大学)を迎え、「比喩の身体性と知性」というテーマで行われた。

本稿では、その概要と今後の展望<sup>2)</sup>について述べる。

## 2. 企画の趣旨

表現学会では、第19回全国大会(1982年)のシンポジウムで隠喩がテーマとなった。そのちょうど20年後、第39回全国大会(2002年)のシンポジウムでは、主に換喩と提喩<sup>3)</sup>がテーマとなった。奇しくも、さらにそのちょうど20年後となる今年(2022年)の全国大会のシンポジウムは、過去2回のシンポジウム<sup>4)</sup>の成果を踏まえ、その延長線上に存在するものである。

さて、比喩の効果的な使用のためには、適切なコンテクストが整っていなければならない。そして、比喩表現の解釈に何が必要かは、そのタイプによって異なる。例えば、基本的な言語表現に埋もれた比喩と、詩的言語の比喩とでは、解釈に必要な要素が明らかに異なるといえよう。

以上の点を踏まえ、今回のシンポジウムでは比喩の解釈基盤の2つの極が存在するという前提に立ち、議論を展開させた。その1つは「身体性」であり、もう1つは「知性」である。両者は、明確に二分されるわけではないものの、一定の性質の差<sup>5)</sup>を有する存在である。

比喩表現は、言語生活のあらゆる場面で使われる。それでは、どのような比喩を、どのような状況で使用しないし理解する際に、どのような知識や経験が必要となるだろうか。今回のシンポジウムでは、認知言語学(小松原氏)、日本語教育学(鷺見氏)、日本文学(西山氏)の視点から、異なる言語使用域の比喩を対象として、多角的な分析と議論を行った。

本稿第3節では、その際のキーワードである「身体性」と「知性」の位置づけについて確認する。続く第4節では、各氏が具体的な考察を進める前提、いわば議論の「共通言語」として、比喩をどのように位置づけたかについて確認する。そして第5節では、シンポジウムを踏まえた今後の展望について論じる。

### 3. 「身体性」と「知性」をめぐって

#### 3.1 「身体性」について

主に認知言語学 (cognitive linguistics) のアプローチによる意味論をはじめとした言語研究では、抽象概念の基本的理解が、身体経験を基盤とした比喩によるものであることが強調されている。そして、身体性基盤の比喩に基づく表現が、言語生活に不可欠な基礎的表現だという点が様々な角度から明らかにされてきている。

例えば瀬戸 (2017: 5) は、「身体性 (embodiment)」を、「私たちの知覚・感覚でとらえた世界の特性が、ことばに色濃く反映すること」と規定している。その上で、私たちの身の回りの言語表現には、身体に関わる表現が広範囲に存在し、その一つ一つが、「肉体を持つ人」と「環境」との関係を解き明かすカギとなると指摘している。つまり瀬戸は、私たちの「身体」は「全体的なエコシステムの中に組み込まれた環境的存在」であり、私たちは「五感を世界に開いた身体的存在」だからこそ、「身体性がことばの意味の重要な部分を形成」するのだと、認知言語学の言語観における「身体性」の位置づけを説明しているのである。

また、「身体性」と「比喩」との関連<sup>6)</sup>をめぐって、平 (2010: 264) は、「いわば、類似性を規定する要因として、主題と喩辞がそれぞれに指示する概念の構造の類似性が、身体基盤を通じて動機づけられている」と指摘している。この例として、平は「彼が舞い上がった」という動詞比喩文を挙げている。すなわち、「喜ぶ」という感情状態を説明しようとしたとき、具体概念である空間における「上」や、喜びに伴う具体的な行為「舞い上がる」が自動的に喚起された結果、「喜ぶ」の代替語として「舞い上がる」が選択された、と推測している。そして、このような例をはじめとして、比喩における身体基盤を通じた動機づけのありようについて、今後、心理実験を通じた検討など、多くの実証研究の積み重ねが必要だと主張している。

以上、本節では今回のシンポジウムの重要なキーワードの1つである「身体性」について確認した。

#### 3.2 「知性」について

主に文学研究では、様々な教養的知識の体系と連想を背景とした比喩の技巧が緻密に考察されてきた。今回のシンポジウムでは、例えばこのような比喩を、「知性」に基づく比喩と位置づけた。換言すれば、「知性」に基づく比喩は、豊かで創造的な言語生活を営むための芸術的表現に深く関係するといえる。

ところで、足立 (2014: 222) は、藤永編 (1981) での記述を踏まえて、「知性」を、「生体が新しい状況におかれた場合のその状況の関係把握や、解決のための見通し・洞察および適切な手段や方法の発見という、広義の問題解決能力」であり、「知覚、記憶、表象、理解、推理、判断などの認知的処理を含む知的な精神活動」であると規定している。ここから、「知性」が「身体性」と並んで、(文学における詩的表現のみならず) 極めて広

範な精神活動に関与する概念であることがわかる。とすれば、「知性」が極めて広範な言語表現の基盤となっていることも自明であろう。

さて、比喩の基盤となる「知性」に深く関与する、佐藤信夫氏の重要な指摘について確認しておきたい。佐藤(1992: 21)は、(比喩を含めた)レトリックの役割として探求すべき事柄を、「印象的な説得力」と「芸術的な挑発力」以上に「発見的認識の造形」であると位置づけた。これは、比喩の基盤となる「知性」のありようへの、極めて的確な捉え方といえよう。(比喩を含めた)レトリックの技術は、佐藤の言葉を借りれば、「私たちの認識をできるだけありのままに表現する」ためにこそ必要なものであり、そのメカニズムの多角的な解明が、比喩研究における重要なテーマの1つであるといえよう。

以上、本節では今回のシンポジウムの重要なキーワードの1つである「知性」について確認した。

#### 4. 「比喩」の規定について

本稿第2節でも述べたように、今回のシンポジウムでは、「認知言語学」、「日本語教育学」、「日本文学」という、異なる3つの分野の研究者間での、「比喩」に関する議論を行った。そもそも、「比喩」の定義や理論的位置づけは、分野によっても、それぞれの分野の研究者によっても、極めて多様である。分野横断での議論をより建設的なものとするためには、「比喩」について(暫定的にであったとしても)共通の見方しておく必要があった。そこで本節では、今回のシンポジウムにおける議論の前提とした「比喩」の規定について確認しておく。

まず、「比喩」について、多門(2018: 771)は「ある物事をそれに類似または関与する別の物事であらわそうとする行為、またその結果としての言語表現。」と規定している。

ところで、意味論上、あるいは修辞学上、重要な比喩は、「隠喩」(メタファー)、「提喩」(シネクドキー)、「換喩」(メトニミー)の3種に下位区分される。

まず、「隠喩」について多門(2018: 771)は、「類似性に基づき、対象を、それが事実として属するカテゴリでなく全く別カテゴリから把握する行為である。」と規定している。なお具体例として、例えば「彼は役者だ」を挙げている。(この場合の「役者」は概略、<駆け引きに長けていたり、人前で抜け目なく振る舞ったりするような人>という意味である。)

次に、「提喩」について多門(2018: 771-772)は、「カテゴリを示してそれに属する特定のメンバを意味したり、逆に特定のメンバを示してそれを包含するカテゴリを意味する比喩である。」と規定している。なお具体例として、例えば「卵を買う」や「僕の周りにはシンデレラが多い」を挙げている。(前者での「卵」は、<卵の一種>としての<鶏卵>という意味である。つまりこれは、<類>から<種>への拡張の事例である。また、後者での「シンデレラ」は、<一夜にして状況が好転するような幸運な女性>という意味である。つまりこれは、<種>から<類>への拡張の事例である。なお、字義通りのケース、すなわち物語の登場人物としての「シンデレラ」は、<一夜にして状況が

好転するような幸運な女性>の一種である。)

最後に、「換喩」について多門(2018: 772)は、「関与性に基づく比喩である。換喩成立のためには当の事物についての経験的知識や百科事典的知識が重要である。また使用因として表現の省略への志向がある。」と規定している。なお具体例として、例えば「漱石を読む」や「九谷を手に入れた」を挙げている。(前者での「漱石」は、「(夏目)漱石」自身ではなく、<漱石の書いた小説>という意味である。また、後者の「九谷」は、地名そのものではなく、<九谷地方で作られた磁器>という意味である。)

なお、「換喩」の定義における「関与性」について、多門は、「従来、換喩は事物の近接性または隣接性に基づくものとされてきたが、これらでは覆いきれない例がある点、また換喩解釈の機構に、関与という概念が必須である点から、関与性という用語を使うのが適当である。」という重要な指摘をしている。

ところで、認知言語学における比喩研究の重要な成果の一つとして、Lakoff and Johnson(1980)に端を発する「概念メタファー」の一連の研究が挙げられる。今回のシンポジウムでは、特に鷺見氏の発題において、概念メタファーに関する具体的な考察がなされた。朧山(2014: 98)によれば、「概念メタファー」とは、「ある対象が直接把握しにくい場合、あるいはある対象をよりよく理解したいという場合に、別のよくわかっている物事を通して理解するという認知の仕組み」のことである。この概念メタファーは、一連の(同種の)隠喩表現産出の基盤として機能し得るものである。例えば朧山(2014: 98-99)は、「鳥」に関する一連の隠喩表現を例に挙げて、概念メタファーの存在意義を説明している。「ピアニストのタマゴとして日々練習に励む。」の「タマゴ」、「あの程度のピアニストはまだまだヒヨッコだ。」の「ヒヨッコ」、「あのピアニストが世界に羽ばたく日も近いだろう。」の「羽ばたく」といった具体的な隠喩表現がある。このように、「鳥」に関する一連の表現が「人間」を描写するのに使われているのは単なる偶然ではなく、基盤として「鳥」を通して「人間」を捉える、「人間」を「鳥」に見立てて理解するという概念メタファーが存在しているのだと指摘している。

以上、「隠喩」、「提喩」、「換喩」という三種の「比喩」、そして個々の隠喩表現産出の基盤としての「概念メタファー」、それぞれについて、今回のシンポジウムでの発題及び議論の前提にした規定を確認した。

## 5. 比喩研究に関する今後の展望

### 5.0 はじめに

比喩は、(言語学における)意味論、修辞学、そして表現研究全般における、古くて新しいテーマである。今回のシンポジウムでも明らかになったように、その脈脈はまだまだ様々に存在していると思われる。以下、シンポジウムを踏まえた、比喩研究に関する今後の展望<sup>7)</sup>について、大きく3つの観点から簡単に述べる。

### 5.1 言語表現に潜む虚構性

「身体性」と「知性」という二分と、「現実」と「虚構」という二分の間には、相関関係が見出せる。小松原氏の発題は、英語の従属接続詞である as if の修辭的用法の考察を通して、比喩の虚構性にアプローチするものであった。虚構性という切り口からの、(比喩をはじめとした) 様々な言語表現の分析・記述や、疑似的な概念化に対する考察は、今後さらなる展開が期待される研究テーマ<sup>8)</sup>であろう。

現代は、バーチャルリアリティ (VR) が溢れる時代である。だからこそ、ヒトにとって「現実」とは何か、「虚構」とは何か、両者はどのように関わり合い、せめぎ合うのかについて、関連する言語表現の具な観察と堅実な記述を蓄積しながら探求していく意義があるのではないだろうか。

### 5.2 コミュニケーションと比喩

日本語や英語をはじめ諸言語を対象とした、語、句、文レベルの比喩表現の記述には、既に豊富な蓄積がある。一方で、談話レベルでの比喩使用のメカニズムについては、多門 (2007) のような先駆的な研究があるものの、今後さらに開拓できるのではないだろうか。

すなわち、コミュニケーションにおける比喩の産出と理解のメカニズムについて、言語表現レベルでの研究を進めると共に、その心理的実在性を検証していく必要があろう。

### 5.3 異なる学問分野間での比喩をめぐる対話

今回のシンポジウムでは、言語表現の探求という枠組みから、比喩の基盤となる「身体性」と「知性」にアプローチした。このような研究そのものは、今後もさらなる蓄積が必要である。ただし同時に、その成果について、認知心理学、社会心理学、哲学など、隣接諸学における知見と照合していくことも必要であろう。加えて、佐藤信夫の一連の研究をはじめとして、古典的な修辭学や表現論での成果の現代的意義の発掘も重要である。

また今回のシンポジウムにおける鷺見氏の発題のように、現代言語理論における比喩研究の、日本語教育学 (をはじめとした言語教育学全般) への応用可能性について、実証的な研究を蓄積していく必要もある。なお、鷺見氏の発題は、日本語教育学 (「多様な言語文化背景をもつ子どもたち」の教科学習支援) の枠組みでありながら、その考察対象として小学校の国語教科書が取り上げられた。すなわち、このようなアプローチの研究 (手法) は、従来十分になされることの少なかった、日本語教育学と国語教育学との対話に繋がる可能性を秘めているといえよう。

さらに、今回のシンポジウムにおける西山氏の発題は、歌枕の喩性に関する日本文学の枠組みでの考察であったが、その中では、日本語学における多門靖容氏の一連の比喩研究の成果が随所で援用された。このようなアプローチをはじめとして、比喩をめぐる文学研究と言語研究 (現代言語理論) との対話も、さらに進展していくことが期待される。

## 6. おわりに

表現学会は、言語学、修辞学、文学、言語教育学、その他様々な学問領域の研究者によって構成されており、「言語表現」という緩やかな共通性が見出されるものの、学問的にいわば蛸壺化されていないことが、組織としての最大の魅力であるといっても過言ではないだろう。

このように学際性の高い表現学会だからこそ、異なる専門領域の研究者が、柔軟かつ大胆な姿勢で比喩について多角的な議論を重ねることが可能である。今回のシンポジウムをひとつの契機として、表現学会ならではの斬新かつ自由な発想での比喩の研究成果が今後も継続的に発信されることを、そして比喩研究の新たな潮流がここから生み出されることを、司会を務めた者として強く願っている。

### 注

- 1) シンポジウムにご登壇くださった3名の先生方、シンポジウムの質疑応答の時間帯あるいは大会の事前、事後に貴重なご質問やコメントをくださった方々、そしてシンポジウムに対面あるいはオンラインでご参加くださった方々に、この場をお借りして深く御礼を申し上げます。
- 2) 本稿では、シンポジウムの企画意図、議論の全体的な方向性、及び議論の前提として登壇者間で共有した諸概念、そして今後の展望について述べる。個々の登壇者の発題内容の詳細については、本誌に掲載される各氏の論考を参照されたい。
- 3) 隠喩、換喩、提喩の定義については、本稿第4節で取り上げる。
- 4) 第19回全国大会でのシンポジウムは、「比喩表現に新しい光をあてる—現代西欧のメタファー理論の創造性—」というタイトルで、登壇者は、三宅雅明氏、半沢幹一氏、吉村耕治氏、岩田和男氏であった。また、第39回全国大会でのシンポジウムは、「比喩分析の新展開—換喩・提喩を中心に—」というタイトルで、登壇者は、多門靖容氏、粗山洋介氏、森雄一氏であった。
- 5) 「基本的な言語表現に埋もれた比喩」の解釈においては主に「身体性」が、「詩的言語の比喩」の解釈においては主に「知性」が、それぞれ関与しているといえよう。
- 6) 例えば「YのようなX」という直喩形式を例に挙げると、この場合の「Y」が「喩辞」であり、「X」が「主題」(被喩辞)である。
- 7) 平(2010: 265-267)では、身体化認知、比喩理解、言語教育との関わりを中心に、これからの比喩研究がめざすべき方向について提言されている。
- 8) なお野田(2022)では、「ゲーム感覚」、「おやつ感覚」のような[X+感覚]というパターンの複合名詞、「お正月気分」、「お姫様気分」のような[X+気分]というパターンの複合名詞の意味の分析を通して、虚構性(疑似的な概念化)に関する探究を行っている。

## 引用文献

- 足立智昭 (2014)「13章 知性と感性の発達」行場次朗・箱田裕司編『新・知性と感性の心理—認知心理学最前線—』福村出版
- 佐藤信夫 (1992)『レトリック感覚』講談社
- 瀬戸賢一 (2017)「第1章 ことばの〈解釈〉、世界の〈解釈〉」瀬戸賢一・山添秀剛・小田希望『「認知言語学演習①」解いて学ぶ認知言語学の基礎』大修館書店
- 平知宏 (2010)「第10章 比喻理解と身体化認知」楠見孝編『現代の認知心理学3 思考と言語』北大路書房
- 多門靖容 (2007)「第1章第2節 対人関係のメタファー」岡本真一郎編『ことばのコミュニケーション：対人関係のレトリック』ナカニシヤ出版
- 多門靖容 (2018)「比喻」日本語学会編『日本語学大辞典』東京堂出版
- 野田大志 (2022)「「感覚」と「気分」の意味論—単純語及び複合名詞後項要素としての使用—」菅井三実・八木橋宏勇編『認知言語学の未来に向けて—辻幸夫教授退職記念論文集—』開拓社
- 藤永保編 (1981)『心理学事典』平凡社
- 粕山洋介 (2014)『日本語研究のための認知言語学』研究社
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. The University of Chicago Press. (渡辺昇一他 (訳) (1986)『レトリックと人生』大修館書店)

(愛知学院大学)